

阿波公方列伝 (1)

初代阿波公方 足利義冬

文化振興課 森脇 佳代子

「阿波公方」は、室町時代末期の初代から江戸時代後期の9代まで、阿南市那賀川町に住んでいました。ここでの「公方」は「将軍家」を意味します。室町時代の将軍は足利一族から輩出されており、その中で阿波に暮らす足利一族のことを「阿波公方」とよびます。そして、「阿波公方」の呼称は江戸時代を通じて使われました。

初代阿波公方・足利義冬は、室町幕府11代将軍足利義澄の長男（一説に次男）として、永正6年（1509）京都で生まれました。兄弟は、後の12代将軍足利義晴。義冬は将軍家の跡取りでした。

その後、義冬は10代将軍足利義植の養子になります。足利家に伝わる足利家文書によると、義父・義植に連れられて淡路島、そして阿波に来たと書かれ

ています。

義冬が歴史の表舞台に出てくるのは、義植が亡くなつてから、大永7年（1527）以降です。阿波をおさめていた三好氏、細川氏に連れられ、徳島から和泉堺（大阪府堺市）にやってきました。その時の様子は、当時の貴族の日記にも書かれており、貴族たちからも注目されていたことがわかります。この時、将軍に就いていたのは兄弟である足利義晴ですが、政権は不安定で、義晴は京都から近江に避難していました。つまり、将軍の座を狙っていた義冬は、京都から将軍がいなくなったタイミングで、四国から本州に進出したというわけです。義冬は危険な京都には入らず、堺から京都を実効支配しました。正式な将軍の任命は受けていませんでしたが、寺社からは「公方」

と呼ばれ、将軍としての仕事（訴訟の対応など）を行っていました。

ところが、義冬の後ろ盾となつていた三好と細川が分裂してしまい、天文元年（1532）、ついに義冬が頼りにしていた三好氏が自害してしまいます。この時、義冬も後を追つて切腹しようとするのですが、細川方にとめられ死にきれなかつたといわれています。支えを失つた義冬は、しばらく淡路島に退き、そののち阿波平島（阿南市那賀川町）の地にやってきました。これが阿波公方のはじまりです。最初は西光寺に住みますが、永禄年間（1558～1570）に平島館（阿波公方・民俗資料館の場所）をかまえ、そちらに移り住みます。

その後、義冬は病気になるてしましますが、将軍の夢を長男である足利義栄に託します。紆余曲折はあるものの、義栄は無事14代将軍に就き、義冬の夢をかなえることになります。

問い合わせ

文化振興課 ☎22-1798



よしはる
足利義晴
(同)



ほそかわ
細川晴元
(同)



よしひさ
足利義冬（義維）
（弘化5年（1848）「英雄三十六歌仙」（個人蔵）より）
英雄36人の中の1人として、初代阿波公方が紹介されています。